

開かれた扉—愛の発見

はじめに

「先生、ちょっとお時間をとっていただけませんか？」
ときには1日に何回となくかかってくる私への電話のことばです。このようなご要請にできるかぎりお応えしながら、二十数年が過ぎていきました。たくさんの電話の主と、電話で、または直接お目にかかってお話ししているうちにいくつかのことを教えられました。

その1つは、ほんとうに多くの方々が「聞いてほしい問題」を持っておられる、人は話したい、だれかに聞いてほしい、人とはそういう存在なのだということです。

それから、人生のまじめな話、深刻な話を語る相手や、話す場が決して多くはないらしい、ということです。雑談の場ならどこにでも見つかるでしょう。気楽なおしゃべりのお相手にはお目にかかれるかもしれません。でも、心の痛みや悲しみ、怒りや不安をわかち合う仲間は決して多くはないのではないのでしょうか。

話したい方々が多いと同時に、話を聞きたい方々もあり、どうやら日毎にこのような方々がふえてきているようです。月に何回か、私の方で話をさせていただく機会を持っていますが、そのような時に参加される方は増加しています。何も特にメンドウな、むずかしい話をしているわけではありません。ただ聖書をひらいて、日常生活に必要なことをいっしょに学んでいるにすぎません。

でも、どなたかに、またその方々のご家庭に、何らかの益をもたらす助けにはなっているようです。

つまり、話をしにこられて何かの重荷をおろされ、方向づけを見つけられる方々と、話を聞きにこられて何らかの解決を見いだされる方々がおられるということなのです。

ここに書かせていただくこうしているのは、そのような多くの方々とのおふれ合

いの中で気づかされたこと、その方々から学んだこと、そしてきわめて実際的で普遍的な教訓なのです。

なかにしるされている方々のお名前は、当然のことですが、プライバシーを守らなければなりませんから、みな変えられるか伏せられるかしています。私が今まで学んできたことが少なくとも何人かの方々の人生を明るくし、解き放ってきたように、このささやかな講話と体験の記録があなたの生活にも何らかの益になれば幸いだと思っています。そして、あなたが「ほんとうに自分らしく」生きる人になる一助になれば……。

おわりに

ある人が私のことを「口が早くて筆のおそい人」と評しました。ごもったもなことだと思います。事実その通りです。話をすることに難しさを感じることは少ないのです。ほとんどないと言えるかもしれません。ところが、ペンをとると、これは全然別の世界のことなのです。話すことができれば、書けるだろう、と別の方が言うていただきました。それはそうでしょう。でも問題があるのです。たしかに、話す内容は頭のなかにあるのですが、それを、実際に原稿用紙に書き出すとなると、この作業が大変なのです。どんなに早く書いても、思索の流れについていけないのです。そして書いているうちに、思考が止まってしまうのです。そして、頑張っているうちに、指も腕も痛んでくるという調子なのです。ですから、講話の録音テープは何百本もありますし、最近ではビデオに収めたものも200本ぐらひはありますが、本となると小冊子程度のものが二冊しかないのが実状なのです。

そういう私に、この本を書くようにとお勧め下さった理想社の石井嗣基氏とご紹介下さった武田兼一良兄には、何と御礼を申しあげてよいかわかりません。しかも書き始めてから二年もお待ち下さったことに対しては、感謝のことばもありません。

でも、その間に私は何百人もの人々と触れあうことができました。その方々もきっと、お待ち下さった出版社の方に感謝しておられるにちがひありません。

その方々の生涯に起こった事柄がまとめられたら、どなたかを励ます1つの本になるにちがいありません。でも、それはまたの機会にゆずりましょう。

ここまでお読みくださったあなたに、ひとつお願いがあります。聖書を一度はお読みいただきたいのです。この私の本などは一読してポイと置かれてしまう程度のものでしょうか。でも、聖書は違います。あなたに、きっとすばらしい世界を拓いてくれにちがいありません。全部読むのに100時間はかかりませんから。是非1度はお読み下さい。そうしてくださったら、この本を書かせていただいた私の心の底からの願いが果たされたことになり、それだけで私は満足するでしょう。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

あなたの上に、イエス・キリストからの祝福が豊かにありますように祈ります。

1985年12月

新井宏二